



四訂 精神保健福祉法の最新知識—歴史と臨床実務—

公益社団法人日本精神科病院協会監修
高柳 功, 櫻木章司, 新垣 元 編著
中央法規出版
2024年9月 628頁
本体価格 ¥5,000+税

2022（令和4）年に改正された『精神保健福祉法』が、2024（令和6）年4月から全面施行となった。今回の改正では、法の目的に精神障害者の権利擁護が明記され、医療保護入院の上限期間の設定や入院者訪問支援事業の創設、虐待防止の制度化など、現場の実務に直結する変更が多く含まれている。精神科医療は、患者本人の自己決定権を一部制限せざるを得ない場面が避けられない領域であるからこそ、適正な法的手続きに則り、本人の権利と尊厳を守る責任がある。精神科医は診療技術のみならず、法制度の理解も必須であるが、条文の解釈や運用を自力で読み解くのは、正直骨が折れる作業である。

そうしたなかで刊行されたのが、本書『四訂 精神保健福祉法の最新知識—歴史と臨床実務—』（中央法規出版）である。精神保健医療の第一線で活躍してきた執筆陣によって構成された本書は、改正法の内容をいち早く反映しつつ、日々の実務で生じうる課題に法律がどうかかわるかを丁寧に紐解いている。法律の理念と現場の運用、その間に横たわるギャップをどう乗り越えるか。本書はその問いに対し、具体的かつ現実的なヒントを与えてくれる。

本書の構成上の大きな特徴は、条文解説にとどまらず、制度の背景や国際的な動向も含めて立体的に理解できるよう工夫されている点にある。例えば第8章では、過去の『精神保健福祉法』改正の契機となった事件や、反精神医学の潮流、WHOや国連などでの国際的な議論の影響が紹

介されており、制度がどのような価値観とともに変化してきたかがわかりやすくまとめられている。続く第9章では、『障害者権利条約』（CRPD）について取り上げられている。近年、精神障害のある人の支援において「障害の社会モデル」や「パーソナル・リカバリー」が重視されるようになってきたが、これらはCRPDの理念と関連が深い。同章では、医学モデルと社会モデル双方の重要性、意思決定支援をめぐる国際的議論の整理に加え、CRPDの厳格な解釈が実務に与える影響についても触れられており、読者にとって思考の足がかりとなる内容である。

また、今回の法改正における実務的インパクトとして、医療保護入院に関する手続きの変更は特に大きい。第5章では、この分野の論点について、成年後見制度や意思決定支援との関係も交えて詳しく論じられている。単なる手続きの確認にとどまらず、その背景にある考え方や課題にも言及されており、制度理解の深まりに寄与する。

実務に役立つ工夫も随所にみられる。例えば第12章では、精神保健指定医のケースレポート作成に関するポイントが整理されており、これから指定医をめざす医師にとっては具体的な手引きとなる内容である。さらに第14章では、病棟での病棟実務についてのチェックリストや運営上の注意点が簡潔にまとめられており、現場で即座に役立つ構成となっている。

他の類書と比べたとき、本書の強みは「理念と実務」「制度の背景と現場の視点」のどちらにも目配りが効いている点にある。条文を押さえるだけでなく、それをどう使いこなすかに重きをおいているため、単なる制度解説書と一線を画す。制度の理解を深めたい初学者から、日々の実務のなかで判断に迷うことの中堅・ベテランの精神科医、さらには看護師、精神保健福祉士、心理職、作業療法士など、精神科医療にかかわる多職種にとって有益な一冊である。「臨床のための法律書」として、手元に置いておく価値は高い。

（平林直次）